えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

えど友

EDO-TOMO

第85号
平成27年
(2015)
5 － 6

江戸東京博物館友の会会報

目次

東京都庭園美術館を訪ねて……1～2
見学会「再訪　江戸城周辺の探訪―その5(外濠)―」…3
えど友広小路……4～5
　会員からの投稿［折箱博物館「木具輪」］
　／えど友サークルだより／友の会めも
第15回定期総会開催のご案内……5
友の会セミナー「町奉行所の与力・同心」……6
学習会「足立区立郷土博物館」……7
友の会特別企画「インド古典舞踊の鑑賞」……7
『町方書上』翻刻刊行を終えて……8
第7回「えど友研究発表会」発表者募集……8
友の会特別観覧会「大 関ヶ原展」……9
江戸博クリップ「桜召しませ」……9
江戸名所図会を歩く⑲［貴船明神社から要島辨財天社］‥10
催事案内／会員優待のお知らせ……11～12

東京都庭園美術館を訪ねて

昨年11月、東京都庭園美術館の閉館後に大広間で開かれる「東京都庭園美術館コンサート2014 第1回 小川典子 ピアノ・リサイタル」に行きました。コンサート終了後、1階のみ見学することができました。名前の由来にもなっている庭園も素晴らしいと聞いていたので、晴天の平日に東京都庭園美術館を再訪することにしました。

都営三田線・東京メトロ南北線の白金台駅から目黒駅方面に向かって歩き6分程で正門に着きました。江戸東京博物館友の会会員証を提示して割引料金でチケットを買いました。本館まで道の両サイドにある大きな木と左側に広がる庭園を眺めながら、期待を膨らませて正面玄関へと進みます。正面玄関で女性像のガラスレリーフ扉が出迎えてくれました。事前に東京都庭園美術館公式アプリをスマートフォンにダウンロードしていたので、各室の解説をイヤホンで聴きながら巡ることができました。

▲本館（旧朝香宮邸）

旧朝香宮邸について

朝香宮家は久邇宮朝彦親王の第8王子鳩彦王が明治39年(1906)に創立した宮家です。鳩彦王は明治43年に明治天皇第8皇女允子内親王と結婚され、大正10年(1921)に朝香宮家の新邸建設用地として白金御料地の西南部の約1万坪が下賜されました。この白金御料地は、寛文4年(1664)に松平讃岐守頼重(高松藩主)の下屋敷となった所で、大正6年(1917)に宮内省帝室林野局所管の白金御料地となり、現在は東京都庭園美術館と国立科学博物館附属自然教育園になっています。

鳩彦王は、軍事研究のためフランスに留学していたとき、大正12年に交通事故に遭いました。看病のため渡欧した允子内親王とともに、大正14年までパリに長期滞在することとなりました。この滞在中、朝香宮ご夫妻は、パリで開催されていた現代装飾美術・産業美術国際博覧会(アール・デコ博)を観覧し、アール・デコ様式に魅了されました。

昭和4年(1929)に朝香宮邸建築計画が動き始め、朝香宮邸の基本設計は宮内省内匠寮の権藤要吉が担当し、内装の設計はアンリ・ラパンと宮内省内匠寮が担当しました。権藤は、貴族の住宅および博物館研究のため欧米に派遣され、パリのアール・デコ博にも数度訪れていました。ラパンは、当時、フランスの国立セーヴル製陶所の芸術顧問、装飾美術家協会の副会長などをした人で、来日はしていません。ラパンから文書、図面、模型が送られ、それを基に宮内省内匠寮が作りあげました。内装の資材、内

装品はヨーロッパ各地から送られてきました。允子内親王は、この建築に特に積極的に関わり、フランス語の図面の翻訳などにも協力され、一部の内装品のデザインについては手紙で意見を述べられたようです。昭和８年４月に竣工しましたが、允子内親王はその年の11月に逝去されています。この朝香宮邸での穏やかな楽しい生活は、とても短かったのではないかと想像されます。昭和22年に鳩彦王は皇籍を離脱してここから転居しています。

その後、外務大臣公邸、白金迎賓館などを経て、昭和58年に東京都庭園美術館になりました。平成５年には、旧朝香宮邸が東京都指定有形文化財(建造物)第１号に指定されています。

東京都庭園美術館

東京都庭園美術館は、旧朝香宮邸(本館)を当時のままに保存した状態で、その室内と調和するように展覧会が開かれています。本館での展覧会は、出展作品と同時に建物内部も鑑賞することができます。今年は、７月18日～９月23日の間に「アール・デコの邸宅美術館　建築をみる2015」が予定されています。このときは、各室の雰囲気を楽しむことができ、平日は写真撮影も可能です。

なお、平成２年には、「平成４年度開館予定　東京都江戸東京博物館収蔵品展」が開催されました。

本館を見学するときは、天井、床、階段、照明にも注目しましょう。お気に入りのデザインを見つけることができると思います。各室のいくつかを紹介します。

正面玄関：本館に入るとすぐ目の前にガラスレリーフ扉があります。これは、フランスのガラス工芸家ルネ・ラリックの作品で、朝香宮邸のためにデザインされました。翼を広げる女性像は、型押ガラス製法で作られています。床は、全面のモザイクで、デザインは宮内省内匠寮技手の大賀隆が手がけました。

▲玄関ガラスレリーフ扉

大広間：天井には格子縁のなかに40個の半円球の照明が配置され、正面のマントルピースは黒とゴールドの大理石、上には15枚の鏡がはめ込まれています。これを挟んでアーチ型の壁と通路がシンメトリーになっています。中央階段右手の大理石レリーフは、イヴァン＝レオン・ブランショの作品「戯れる子供たち」です。ブランショは、フランス滞在中の允子内親王に水彩画を教えています。

▲戯れる子供たち（大理石レリーフ）

次室：南側のテラスに面した次室（つぎのま）は大広間から大客室へのつなぎの役割をもっています。白磁の「香水塔」、モザイクの床、黒漆の柱、朱色の人造石の壁は、アール・デコ特有の華やかな空間を形成しています。白漆喰の天井は半円球のドームとなっています。「香水塔」はラパンのデザインで、国立セーヴル製陶所で製作されたものです。朝香宮邸時代に上部の照明部分に香水を入れ、照明の熱で香りを漂わせたという由来から、「香水塔」と呼ばれるようになりました。

▲次室の香水塔

大客室：この室内には幾何学的にデザインされた花をモチーフにした装飾が多数あります。ラリック制作の２灯のシャンデリア、扉上部にあるレイモン・シュブのタンパン装飾、マックス・アングランの銀引きフロスト仕上げのエッチング・ガラスを嵌めこんだ扉や暖炉のレジスター装飾などです。壁面の上部を囲むように木製ボードに描かれた壁画はラパンの作です。

▲大客室

大食堂：来客時の会食に使用された部屋で、インテリアは食べ物のモチーフで統一されています。ラリックの照明器具(パイナップルとザクロ)やガラス扉等にくだものがデザインされ、ラジエーターカバーには魚貝がデザインされています。暖炉の上の壁画はラパンの作で、赤いパーゴラ(つる棚)と泉が油彩で描かれています。植物文様の壁面はブランショのデザインによるものです。

▲大食堂の暖炉

庭　園

名前の由来にもなっている庭園は、「日本庭園」、「芝生広場」、「西洋庭園」の三つから構成されていて、日本庭園には池と茶室があります。この４月25日(土)から庭園の一部が公開されました。天気の良い日には、芝生に寝転んでみたり、新館のカフェから庭園を眺めてもよいと思います。

参考資料：
『庭園美術館へようこそ：旧朝香宮邸をめぐる６つの物語』河出書房新社、『開館30周年＆リニューアルオープン記念　東京都庭園美術館』、『旧朝香宮邸のアール・デコ』

【取材】文・写真：広報部会・前田太門

江戸東京博物館友の会　見学会　（平成 27 年３月８日）

「再訪　江戸城周辺の探訪 ―その５（外濠）―」

南部坂付近の今

東京メトロ溜池山王駅を順次出発した私たち一行は、溜池跡の一角を確認し、「南部坂」へ向かいました。この坂は盛岡藩南部家の屋敷があったことから名づけられました。一般には忠臣蔵の名場面、大石内蔵助が瑤泉院（浅野内匠頭夫人）に暇乞いした「南部坂雪の別れ」の舞台として知られています。この坂道を境界線として北側は松平美濃守（福岡藩黒田家）中屋敷跡、南側は現在アメリカ大使館宿舎となっています。

▲南部坂

南部坂を戻って六本木通りを横切り霊南坂へ抜けると、左側にアメリカ大使館があります。山口筑前守上屋敷跡です。常陸牛久藩領主ですが、戦国時代は西国最強の大名であった大内氏の系統といわれています。

虎の門と江戸の四神

赤坂見附跡から特許庁前付近までの外濠通りは、元々「溜池」と呼ばれる大池でした。その後、名前は残したまま全域が外濠に取り込まれ、特許庁前付近には余水を落とす堰が設けられました。広重の『名所江戸百景』中「虎の門外あふひ（葵）坂」に描かれています。

金刀比羅宮（ことひらぐう）は讃岐丸亀藩主・京極高和が、万治３年（1660）に領内の金比羅（こんぴら）大権現の分霊を邸内社として三田屋敷に勧請したのが始まりです。その後、藩邸の移転に伴い現在地へ遷座されました。文化年間（1804～18）頃から、毎月10日を限り一般庶民へ開放したため、参詣人が多く集まるようになり、今も残る銅鳥居が寄進されたりしました。なお金比羅とは、ガンジス川のワニを神格化したインドの仏教守護神「クンピーラ」を音訳したものです。

虎御門は江戸城外濠の見附門ですが、四神思想の影響を受けた名称です。天子南面といわれるように、天の中心で南を向いて座っている天子は、東（青龍）西（白虎）南（朱雀）北（玄武）を神に守られているという考えかたです。日本でも天皇はじめ貴族は、北（玄武）を背に南（朱雀）を向いて座りました。ところが江戸では西を玄武としました。従って、北が青龍、南が白虎になります。虎御門は江戸城から見て南ですから、（白）虎の門なのです。因みに吉原を青楼（龍）と呼んだのは江戸城の北だからです。

幸橋御門跡から日比谷見附跡

新橋駅の北側付近の東海道高架線は旧外濠沿いを走っています。この高架線を挟んで東側に土橋（土橋交差点付近）が、西側に幸橋御門がありました。御門内には松平（柳沢）甲斐守の屋敷がありましたが、明治維新後は最初の東京府庁が置かれました（明治27年・1894まで）。

▲日比谷見附跡

日比谷公園は、長州萩藩毛利家や肥前佐賀藩鍋島家等、雄藩の屋敷跡です。維新後は明治26年まで陸軍練兵場とされましたが、明治36年には最初の近代的洋式公園として開園しました。北東側入口に日比谷見附跡の石垣が残され、濠跡を利用して造られた心字池が接しています。

南町奉行所跡から常盤橋

数寄屋橋御門は慶長年間（1596～1615）には既にあったようです。寛永13年（1636）には、見附門に造り替えられました。門内には、大岡越前守が奉行を勤めた南町奉行所がありました。現在、有楽町駅南中央口に石碑が、地下に土蔵跡の遺構が残されています。

▲南町奉行所跡

旧都庁舎跡地の国際フォーラムは、土佐藩山内家の上屋敷跡です。藩祖は妻の内助の功の逸話で知られる山内一豊です。最後の藩主・容堂は幕末の四賢侯の一人に評価されますが、志士からは「酔えば勤皇、覚めれば佐幕」と揶揄されたりしていました。

御用絵師・狩野探幽の屋敷は、鍛冶橋交差点近くに架かっていた鍛冶橋のすぐ南にありました。北町奉行所は東京駅八重洲北口付近にあり、それを示す説明板が、北口にあるビルの非常口の壁の足下に貼り付けてあります。その向こうは遊歩道になっており、そこを抜けると一石橋です。橋の北側に金座の後藤家（＝五斗）、南側には呉服商の後藤家（＝五斗）があったから、合わせて一石というわけです。橋のたもとに迷子標があります。

橋を渡ると左奥に常盤橋が見えます。江戸で最も古い橋といわれ隅田川に両国橋が架かるまでは江戸一の大橋といわれていました。ここで今日の予定を終え、解散しました。

参加者：125人。

【取材】文：広報部会・光田憲雄
写真：同・竹中祐見子

会員からの投稿

―両国周辺散歩 小さな博物館―

【折箱博物館「木具輪」】

川　上　由美子

伝統的な食品容器：折箱

折箱と聞いて思い出すのは、お弁当や料理のテイクアウト、そしてその名の通りの菓子折りなどです。幼い頃、仕事帰りに一杯飲んだ父親がお土産に持って帰ってくるお寿司は経木の折箱入りでした。今では「高級」な物にでないと使われなくなっていますが、当時は携帯用、贈答用の食品容器としてはごく普通だったように思います。そんな懐かしい木製の箱たちが店頭の棚に並ぶのが折箱博物館「木具輪（きぐりん）」です。「木具輪」、かわいらしい響きの言葉ですが、創業者の名前に由来する屋号とのこと。木具師（角の物を作る木工職人）の輪吾さん→木具輪だそうです。

展示品は戦後間もなくの頃、職人さんが腕試しに作った物が中心。伝統的な木箱、折箱造りの粋を集めたといえるもので、多様な素材、洗練されたデザイン、凝った仕上げの品々が並んでいます。代表の須藤俊雄さんのお気に入りは屋久杉でできた菓子箱。色違いの縄文杉で縁取りがされている木目の美しい箱で、一回限りの食品容器をここまで高めた日本人の感性は感動的ともいえます。

千年以上の歴史を持つ折箱

折箱の起源は６世紀、朝廷への献上物を入れた木製の容器だとか。以来使い続けられてきた天然素材の食品容器、折箱。その背景を前述の須藤さんからの受け売りですが記してみます。

まず素材からくる機能性：木は通気性に優れ、除湿吸湿の調整ができる。また抗菌成分を含むものもあり、食品保持機能が高い。

次に森の維持に貢献するエコロジー性：森は「植えて育てて切って」を繰り返すことによって初めて維持していくことができる。木で折箱を作り、使い、廃棄していくことは、大きな再生と環境保護の輪の中にいるということになる。

そして真っ新（まっさら）を愛する日本人の気持ち：日本人は「誰も使ったことがないまっさら」が好き。それが一回限りの食品容器という文化を生んだ。さらの象徴、白木であるということも折箱の定義の一つである。

以上、使い続けられてきたことに納得の折箱の魅力です。

行き方

両国駅からは清澄通りを南へ。堅川（高速）を過ぎて４本目を左折すると右側にあります。徒歩15分程。
開館は月～金曜日、9時～17時。
電話03－3631－7785
〒130－0023墨田区立川1－3－5
株式会社スドウ

博物館東側には『鬼平犯科帳』にも登場する江戸市中十二薬師六番、弥勒寺が、また清澄通り西側の歩道を歩けば中田屋茶舗、宮川唐がらし店等ちょっとひかれる店があります。

えど友 サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会

2月17日（火）月番藤村一夫さんで、国立演芸場にて落語４席、コント１席、鹿芝居（しかしばい）（噺家の芝居）「人情長屋」を鑑賞した。各出演者の熱演は見応えがあった。参加者18人。

3月17日（火）月番松原良さんが「八代目林家正蔵（林家彦六）の思い出」というテーマで資料を用いて話された。話の後「林家彦六」のビデオを鑑賞した。参加者17人。

◆藩史研究会

2月20日（金）安倍良男さんが「会津藩」の発表をした。若松城（鶴ヶ城）は蒲生氏郷により築城された。加藤氏の後、3代将軍家光の異母弟保科正之が会津23万石に転封、3代藩主正容の時に松平姓を下賜された。幕末、9代藩主容保の時に新政府軍の攻撃により降伏、開城した。藩のその後のほか、新政府への対応のくわしい解説があった。参加者19人。

3月9日（月）遠藤陽子さんが越前「勝山藩」の発表をした。徳川家康次男結城秀康が福井藩68万石の大名として入り、勝山藩はその支藩としてスタートしたが廃藩、天領となる。その後、元禄4年（1691）美濃高須から小笠原家が移封され幕末まで180年近く治めた。参加者19人。

◆古文書で『八丈実記』を読む会

2月12日（木）八丈島長戸路家に伝わる御用留（明和～寛政年間）P50～54の疱瘡の流行に対する心得を書き留めたものを解読した。参加者8人。

2月27日（金）八丈島長戸路家に伝わる御用留（寛政4年）P1～12を解読した。飢饉により155人が死亡した経緯を江戸の江川太郎左衛門役所に報告する年寄源左衛門の手紙。参加者7人。

3月12日（木）八丈島長戸路家に伝わる御用留（寛政4年）P12～20を解読した。年寄源左衛門の先回の飢饉を報告する手紙の続き。参加者7人。

3月27日（金）八丈島長戸路家に伝わる御用留（寛政4年）P28～36を解読した。大勢の餓死者を出した後も旱（ひでり）が続くがお金もなく前借りを役所に懇願する年寄源左衛門の手紙。参加者6人。

◆江戸東京を巡る会

2月11日（水）初午で賑う装束稲荷神社、王子稲荷神社を巡り、『江戸名所図会』に描かれている名主の滝公園、音無親水公園、王子神社、飛鳥山公園を散策した。参加者50人。

◆『江戸名所図会』輪読会

2月19日（木）中村貞子さん担当で多摩川、今は高幡不動で有名な高幡

山金剛寺を発表した。高幡不動には平維盛の墓と伝承されていた文永の板碑が移設されている。参加者18人。
3月19日(木) 舩津恭子さんの担当で日野市百草(もぐさ)にあった今はない松蓮寺、江戸時代以前にあって図会の頃には判然としていなかった真慈悲寺について最新の発掘資料で説明があった。多摩市一ノ宮にある小野神社は府中六所宮(大国魂神社)の一宮として江戸時代後期には一宮大明神社と呼ばれていた。参加者20人。

◆「落語で江戸散歩」をなぞる会

2月21日(土)『えど友』 44号10頁「落語で江戸散歩③道灌」の一部をなぞるとして「太田道灌ゆかりの地」岩槻を訪れた。午前中は太田資暁さんと地元郷土史家の小宮勝男さんによる岩槻城と太田道灌に関する講演を聞き、東玉人形の博物館を見学した。天保年間創業の「ふな又」で食事のあと、道灌の銅像、墓所のある芳林寺、郷土資料館、岩槻城を散策し、酒蔵資料館、藩校の遷喬館を見学し解散した。参加者41人。
3月29日(日)『えど友』 49号10頁「落語で江戸散歩⑧長屋の花見」をなぞって歩いた。JR御徒町駅に集合、落語協会事務所、旧本牧亭跡などを見たあと、桜も見ごろの上野公園を歩き「長屋の花見」の舞台とされる擂鉢山に登った。さらにソメイヨシノの原木候補(小松宮親王像のそば)や上野東照宮などの公園の旧跡をめぐり解散した。参加者38人。
4月2日(木)1回目と同じコースを巡った。参加者41人。

◆日本の大道芸伝承会

2月11日(水)発声練習の後、南京玉すだれ、物売り等の練習。参加者3人。
2月26日(木)発声練習の後、南京玉すだれ、物売り、仙人等の練習。参加者3人。
3月9日(月)深川江戸資料館にてイベント「江戸の物売りと大道芸」の現場リハーサル。BSジャパンの取材撮影が入る。参加者3人。
3月11日(水)発声練習の後、南京玉すだれ、物売り、仙人等の練習。参加者3人。
3月19日(木)発声練習の後、南京玉すだれ、物売り、仙人等の練習。参加者3人。
3月21日(土)深川江戸資料館のイベント「江戸の物売りと大道芸」に参加。11時30分と14時に出演。ケーブルテレビの取材撮影が入る。参加者3人。

◆江戸を語る会

3月7日(土)大森美恵子さんが「玉川兄弟物語」を発表した。自分で描いた紙芝居に沿って玉川上水の計画、工事の概要、上水の仕組みなどを説明した。紙芝居の絵でわかりやすく図示する工夫に感心した。参加者11人。

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しております。参加希望の方は、はがきに①サークル名②会員番号(必須)③氏名を記入の上、友の会事務局へお申し込みください。ただし輪読系の2サークルについては定員に欠員が出たときに先着順で参加いただけます。

友の会めも(開催日と人数)

平成27年2月～3月

◆役員会2月10日(火)13人。3月10日(火)13人。◆事業部会2月3日(火)26人。3月3日(火)25人。◆広報部会2月17日(火)10人。3月17日(火)11人。◆総務部会2月24日(火)26人。3月31日(火)18人。◆町方書上翻刻プロジェクト2月はA班B班共、自宅作業。3月5日(木)A班B班合同会議。参加者15人。3月はA班B班共、自宅作業。

カット：
佐藤美代子さん

第15回定期総会開催のご案内

新しく入会された方の参加を歓迎します

今年も友の会定期総会の季節がやってきました。定期総会は会員が一堂に会し、過去1年の活動を振り返るとともに本年度の活動について率直な意見交換のできる場です。同封の議案書をご検討いただき、多くの会員の皆さんがご出席くださるよう、お願いいたします。
開催要領は次のとおりです。

●平成27年度　友の会定期総会

日時：5月29日(金)13時15分開会
会場：江戸東京博物館・1階ホール

◇主な議案

・平成26年度事業報告ならびに収支決算報告
・平成27年度事業計画案ならびに事業予算案
・その他

●竹内館長の記念講演

総会に続いて、江戸東京博物館竹内誠館長による記念講演が予定されています。演題は「浅草の今昔を語る」です。ご期待下さい。

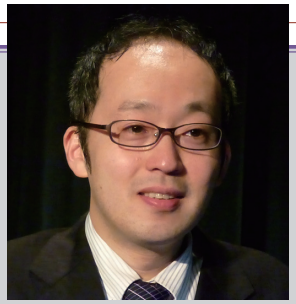
●会員交流会

記念講演会終了後、16時45分より、7階「桜茶寮」において会員交流会を開催致します。会員同士の交流、親睦を深める良い機会ですので是非ご参加下さい。会費は500円です。

第150回　江戸東京博物館友の会セミナー（平成27年2月28日）

「町奉行所の与力・同心」

講師　滝口正哉さん（千代田区教育委員会文化財調査指導員）



町奉行所の与力・同心は、江戸のことを知るためには欠かせないテーマです。時代劇でおなじみの与力・同心の実態はどうだったのか、史料をもとにお話しします。

町奉行所の機能

まず、『大成武鑑』(嘉永2年・1849)の町奉行所の項目を見てみましょう。町御奉行の上に、丸に老とあります。これは、老中の配下であることを意味します。「芙蓉之間、三千石高、内寄合六日十八日廿七日、与力廿五騎同心百廿人宛」続いて「五百石　遠山左エ門尉景元　南数寄屋橋御門内」、「二千五百四十八石　井戸対馬守学(覚)広　北　呉服橋御門内」などと書かれています。

町奉行の役高は3000石ですが、遠山は500石ですので在職中は2500石をプラスしてもらっています。これは、享保8年(1723)に足高の制が導入され、役高の3000石に満たなくても有能な人材を抜擢していたためです。町奉行所の経費は、基本的には奉行の収入から支払われます。

南町奉行所は数寄屋橋御門内、今の有楽町駅前辺り、北町奉行所は呉服橋御門内、東京駅八重洲口辺りにありました。

町奉行所は月番制で勤務にあたり、非番の月は大門を閉鎖して前月に受理した仕事の処理に専念しました。月番の奉行所では、6日・18日・27日ごとに配下の牢屋奉行石出帯刀、町年寄、地割役を集めて行われる内寄合(会議)があり、与力、奉行の家臣などが加わり、職務報告、願書・通達などのさまざまな申し合わせが行われます。

町奉行所の管轄範囲は、町人地に寺社門前町などを加えた地域です。江戸時代後期では、東は向島、江東区の亀戸、砂町辺りまで、西は代々木、新宿の端、南は品川、高輪、目黒辺りまで、北は千住、三ノ輪、巣鴨周辺までで、朱引よりも少し狭い範囲です。江戸中期以降、江戸の町人人口は50万人いたといわれています。ここを与力(25×2)、同心(120×2)で、合計300に満たない人数で管轄していました。多くは町方の自治に支えられ、町名主の管轄内で大抵のことは片づけてもらうことが前提になっていました。

与力・同心

与力・同心は、御家人身分で、旗本のように登城して家督を受けるということはなく、「抱席」という、その身一代に限って雇用される不安定な形態をとっていました。しかし、実際には子が見習いで出仕するなど、事実上の世襲といってもよい状態にありました。

与力は知行取り200石で、騎馬に乗る格をもっていましたが、実際には勤続年数や役職によって170石～230石程度の差がありました。与力の給地は、上総・下総に合計1万石(各5000石)ありました。

同心は、蔵米取りで30俵2人扶持を春・夏・冬の三季に分けて受け取っていました。1人扶持は蔵米5俵ですから、合計すると同心は40俵になります。蔵米取り1俵は知行取りの1石に相当するので、与力は同心の5倍の賃金を得ていたことになります。

町奉行所にはたくさんの役職があり、大半は担当与力の下に同心が配属されています。ただし、「三廻り」といわれた定廻り、臨時廻り、隠密廻りなどは同心の専任です。与力中の最古参で有能な者がつとめる年番与力は、町奉行所全般の取り締まり、金銭の保管と出納、各組の監督など広い範囲に及ぶ職務と権限があり、同心の任免権をも持っていました。そのため、任期が短期間の場合が多い町奉行も口出しができないこともあったといわれています。他に重要ポストとして公事(裁判)を担当する詮議役(吟味方)があります。有能な人は多くの役職を兼務している傾向にありました。

町奉行所内には、執務場所の他に奉行とその家族の居住場所もあります。また、奉行の家来も敷地内の長屋に居住しています。与力・同心は、八丁堀組屋敷に住んでいます。与力は300坪、同心は100坪程度の敷地を持ち、南町奉行所、北町奉行所に関係なく混在して住んでいます。また、一部の敷地は内々で貸し出され、医者、儒学者、国学者、盲人、常磐津の師匠、手習い師匠などが住んでいました。そのため、与力・同心のあいだでは習い事が盛んで、文化的素養の高い人が多くいました。

町役人

少数の与力・同心だけでは江戸の町を取り締まることは難しいので、町触の伝達、人別改、火の元取り締まりなどの機能は、町役人による自治に委ねられていました。町奉行所から発せられる町触は、町年寄の役所に届き、そこに各町名主が赴いて伝達を受け、順次、月行事、家主(大家、家守)、地借・店借へと伝達されます。訴訟などは、この逆の順に上申され、ほとんどのものは町名主のところで解決していました。

レポーターからひとこと

武鑑、絵図など多くの史料を示して説明されたので、よく理解することができました。与力・同心の生活の一端にも触れられたので、全体像を把握することができました。 参加者205人。

【記録】文・写真：広報部会・前田太門

江戸東京博物館友の会　学習会
（平成27年2月18日）

足立区立郷土博物館を訪ねる

まずは2階講堂にて多田学芸員と小林専門員にレクチャーを受けました。

当館は昭和61年(1986)地元の資料館誘致によって建てられた郷土博物館です。桜並木で有名な葛西用水のほとり、隣には日本の名庭100選に選ばれた造園家小形研三氏設計の東淵江(ふちえ)庭園があります。建物は低い土地柄、堤防が切れても収蔵庫・書庫のある2〜3階が水に浸からない高さに設計されています。初めは足立の歴史を縄文時代の遺跡から時系列に並べた通史的展示をしていました。開館20年を機にリニューアルし平成21年3月にオープンしました。館蔵歴史資料は江戸時代以降のものがほとんどなので「江戸東京の東郊」をテーマに足立の都市近郊らしさを展示のメインにおいています。

区内の住民主導で建てられた博物館ということもあり、協働グループ(足立史談会など12団体)が館内のグループ学習室、図書室で研究活動をしています。館所有の資料整理ボランティアや、近年千住宿(北千住)で暮らしの中で使われていた美術品(江戸琳派の作品など)の発見にも寄与しています。

2月10日より4月6日まで開催されている特別展「浮世絵展　歌川派と歌舞伎」のレクチャーでは、館が購入した松方三郎(明治の元勲松方正義の15男)浮世絵コレクション1300点と区民所有の浮世絵をもとに役者絵の誕生、発展、絵師の系譜、多様な媒体(広告、名所絵、判じ絵、おもちゃ絵など)に沿って詳しい説明がありました。

休憩の後、2班に分かれ、館内展示の説明を受けました。2階では歴史資料の収蔵庫とそばの大きなエレベーターに納得し、学習室や図書室では館と協働グループの方々との親密な関係の裏話も聞くことができました。実物大に展示されている木造平屋建て都営住宅には室内まで入り、家財道具も含めて昭和30年代を満喫しました。1階常設展示室では江戸・東京の東郊としての足立の歴史を絵図、地図、集落のミニチュア模型、原寸復元の肥溜め、やっちゃ場の問屋の店先、本物の千住ネギたばね器など、いろいろな形で子供たちにもわかりやすく理解させようとする工夫に感心しました。展示室の隣の子どもホールでは昔の道具がボックス型のラックにたくさん展示されていました。

特別展では一つずつの額装展示ではなく版画そのものが見やすい角度にされた展示板に並べてありました。鳥居清長、歌川豊国、歌川国芳、歌川国貞などの作品が並ぶなか、浮世絵版画の摺りのいろいろな技術をそれぞれの作品で説明を受け、参加者みんなが浮世絵の技術を堪能することができました。担当の小林専門員には、5月23日のえど友セミナーの講師をしていただくことになっています。

解説が終わり自由解散となりましたが、あいにくの雨の中、隣の東淵江庭園を散策したり、お弁当持参でゆっくり博物館を楽しまれた方もいらっしゃったようです。参加者44人。

JR亀有駅北口よりバスで足立郷土博物館下車、休館日は月曜日、開館時間は9時から17時まで、入館料は200円です。

【取材】文･写真：広報部会･佐藤美代子

友の会特別企画（平成27年3月6日）

「インド古典舞踊の鑑賞」

―Tillana Tokyo & Co. in 江戸東京博物館―

昨年の富岡製糸場関連講演会に続く特別企画の第2弾として、インド古典舞踊の鑑賞会が行われました。出演者はインド古典舞踊ティラナ(Tillana Tokyo)のメンバー及びゲストの方々です。「落語で江戸散歩」をなぞる会との偶然の出会いがきっかけで、今回の公演が実現しました。

Tillana Tokyoは、日本のインド古典舞踊のパイオニアである故小澤陽子さんの門下生を中心として2007年に結成されました。ティラナとは「喜び」を意味しています。インド古典舞踊の中でも、バラタナティヤム、オリッシー、クチプディと呼ばれる踊りを取り上げてレッスンや各種ステージに取り組んでおり、現在のメンバー数は15人です。

プログラムは司会者がそれぞれの演目や振り付けの解説を行ってから踊りをするという構成で進められ、初めて見る方にも親しみやすいものでした。演目にはシヴァ神やジャガンナート神をたたえるものや自然を表すものなどがあり、身体表現やリズムも様々です。時に激しく時に優美に表現される踊りは、見る者の心をインドへと誘っていきます。初めはすいていた前方の座席が、途中休憩時に次々と埋まっていき、観客がどんどん引き込まれていく様子が手に取るようにわかりました。

通常の友の会催事と比べるとかなり異色の催しでしたが、今後もいろいろな分野の企画を期待しています。

参加者161人。

【取材】文・写真：広報部会・菊池真一

『町方書上』翻刻刊行を終えて

平成20年1月に発足した「町方書上翻刻プロジェクト」は、昨年全巻の翻刻を終え今は索引巻を作成する作業に入っています。その打ち合わせで集まった皆さんにお話を聞きました。プロジェクトチームは江戸東京博物館の市川寛明学芸員からのお誘いで、友の会会員からの公募、えど友サークル「古文書で『八丈実記』を読む会」の会員を中心に結成されました。

村の古文書を読んで15年という方、地元の旧家文書を探して整理し目録を作ったという方、古文書の翻刻刊行した方、と経験者も多かったのですが、古文書講座からの公募で参加された方々は読み合わせ会を目標に、古文書の翻刻の勉強に熱中し、友達からは付き合いが悪くなったと言われながらの作業だったようです。

翻刻作業にはいろいろな仕事があり、原本のコピーを人数分用意したり、虫食いかシミか判断が付かず、原本のある国会図書館に調査に行ったり、内容でわからないことを調査したり、パソコンに翻刻した文章を打ち込んだり、校正をしたり、江戸博の指導学芸員との打ち合わせ、印刷刊行などの事務処理など、各々の得意分野を担当し、持ち味を生かしていたとのことです。

古文書がますます読めるようになったのは当たり前ですが、翻刻文作成のためにパソコンを使うことで、パソコンのいろいろなワザも覚え、勉強になったということです。そして、一つの仕事をやり遂げた充実感、大好きな江戸時代、自分の子供時代にとっても懐かしい町のことをたくさん知ることができ、楽しかった(その場所を歩いたりした方もいる)とは皆さんの感想でした。

翻刻作業の中でたくさんの面白い発見があったようです。目黒編で取り上げられた板碑は今もその場所に立ち(原本では梵字を写すのが下手で読むのに苦労した)、埼玉の村方文書(見沼通船堀文書)が外神田編に載っているのを地元の方が発見したり、深川で医者をしている赤穂の浪人の家に泥棒直助が押し入り、その屋敷が直助屋敷と呼ばれた話、さといものお供えが嫌いなお稲荷さん、小石川編では浅井(あざい)氏の末裔たちが100年忌(文永年間)をした記録があったり、各編でたくさんの孝行者の記録が載っているが案外と男の独身者の孝行者が多い、など。また翻刻では常用漢字を使うことに統一したが、なんだか書き手の心から離れて雰囲気が伝わらないように思うなど、心残りもあるようでした。

今後については、江戸博の古文書を翻刻するボランティアチーム結成の話もありますが、今度は居住する地元の古文書の翻刻にがんばりたいという方々もいます。

また刊行した翻刻本はアメリカのコロンビア大学とカリフォルニア州立大学からも問い合わせがあり、寄贈しました。地球の裏側でも江戸の町がわかるためにとの夢が一つ実を結び、また次の夢に広がっていくようです。

「町方書上翻刻プロジェクト」
に参加した方々(敬称略)

(A班) 赤崎　進、牛島理子、小島みどり、齊藤紀子、佐藤壽昭、新倉隆一、丹羽高利、宮澤誠一、宮本慶子、江口浩平
(B班) 大野晴美、大矢敏夫、岡橋園子、笹原一徳、髙澤金吾、塚田義治、津嶋靖弘、寺嶋滋夫、本庄文江、三神千種

【取材】文：広報部会・佐藤美代子

第7回「えど友研究発表会」の発表者を募集します

ご好評をいただいております「えど友研究発表会」を今年度も行います。発表会の主旨は、長年の研究・調査の結果を発表したいという会員のニーズに応えるとともに、質疑応答や討議を通じ会員相互の交流を深め、友の会の一層の活性化に資するというものです。

発表テーマは「江戸東京の歴史と文化に関するもの」とし、特定の政治・宗教・信条・事業等の宣伝・広報に類するものは不可とします。また、発表者は友の会会員に限るものとし、講演料等のお支払いは致しません。2テーマを予定し、1テーマにつき質疑応答を含め1時間程度の予定です。

発表会は8月4日(火)の午後1時から江戸博1階会議室で開催予定です。日頃の成果発表に奮ってご応募くださるよう発表者を募集します。

発表を希望する方は、はがきに「発表会応募」と明記し、氏名、会員番号、電話番号、テーマを書いて事務局宛お送りください。折り返し「えど友研究発表会申込書」をお送りしますので、所要事項をご記入の上事務局へご返送ください。同申込書の提出をもって正式の応募といたします。応募締め切りは5月末です。なお応募多数の場合は調整させていただきますが、その結果につきましては6月上旬に応募者にご連絡いたします。

【企画担当責任者】内山文伸(事業部会)

江戸東京博物館友の会特別観覧会
（平成27年４月７日）

徳川家康没後400年記念特別展
「大 関ヶ原展」

３月28日（土）、江戸東京博物館常設展示室リニューアルオープンと同時に開催された特別展「大関ヶ原展」、その初日に入場しました。大変な盛況で、展示コーナーの前はどこも黒山の人だかり、容易にはそばに近づけないありさまでした。あらためて世界に類を見ないといわれる日本人の歴史好きを思い知らされました。老若男女を問わず、戦国時代や、そのハイライトである天下分け目の戦い関ヶ原への関心の高さ、人気度は驚くばかりです。本展のキャッチコピー「日本の運命を変えた１日が、今よみがえる。すべての戦いには　人の思いがあった」には心を揺さぶられました。

その「大関ヶ原展」の友の会特別観覧会が４月７日（火）17時から開催されました。初めに、本展覧会の担当、学芸員の齋藤慎一さんから説明を受けた後、見学に入りました。

会場に入ってすぐ初めに目に飛び込んできたのが、齋藤学芸員一押し、８曲１双の大きな「関ヶ原合戦図屏風」（大阪歴史博物館蔵）、長さは5.9ｍもあり迫力満点です。江戸時代初期に描かれ、「関ヶ原合戦図屏風」としては現存する最古のもので重要文化財に指定されています。この金箔を施した豪華な屏風は、家康の養女満天姫（まてひめ）の嫁入り道具の一つだったそうです。

次のブースには「豊臣秀吉自筆辞世和歌詠草」がありました。秀吉が死に臨んで詠んだ有名な歌「つゆとをち　つゆときへにし　わかみかな　なにわの事も　ゆめの又ゆめ　松」かすれた筆跡が天下人秀吉の晩年の境地を物語っているようで言い知れぬ哀れさを感じさせます。

本展示品の中には、国宝指定になっている上杉景勝宛ての「徳川秀忠書状」、島津義弘宛ての「福島正則書状」や「本多正純書状」があります。いずれも合戦前後に書かれたもので、戦国武将たちの駆け引きや思惑が感じられて非常に興味深いものです。

今回は、刀剣、槍などが数多く展示されています。石田三成愛用の名刀、上杉景勝所用の太刀、徳川四天王榊原康政、井伊直政の太刀、大谷吉継の所持した短刀、本多忠勝所用の槍、徳川家康所用の薙刀などがあります。中でも必見は重要文化財になっている「薙刀直（なぎなたなお）し刀　骨喰（ほねばみ）藤四郎」。京都粟田口の刀工、藤四郎吉光の作と伝えられ、切る真似をするだけで骨まで砕けるとの逸話からその名で呼ばれた鎌倉時代の名刀で、刀身には剣と龍が精緻に彫り込まれています。源頼朝から足利将軍家、豊臣秀吉、徳川将軍家を経て、現在は豊国神社に奉納されています。

最後のコーナーは、仄暗いブースの壁に大坂夏の陣図屏風が写し出され、その中、勝利した家康と、炎上する大阪城と秀頼だけにスポットライトが交互に当てられ、まさに兵どもの栄枯盛衰を物語るエンディングとなっています。

展示期間は５月17日（日）までです。まだご覧でない方はぜひご鑑賞ください。また本展の図録は400ページに及ぶ大変美しいカラーの豪華本で、関ヶ原合戦のすべてが網羅されています。歴史好きの方に特におすすめです。　　参加者186人。

【取材】文：広報部会・岡本　脩
写真：同・前田太門

江戸博クリップ

「桜召しませ」

事業推進係学芸員　　田中　実穂（たなか　みほ）

この原稿を書いている３月末、窓の外は白い光を集めたかのような、見事な満開の桜、染井吉野でいっぱいです。咲いているのは、１年365日のうち、長くても約10日。この時期になると「世の中に絶えて桜のなかりせば 春の心はのどけからまし」が思われます。仕事をしている場合ではありません。博物館３階のひろばへの階段には、花に立ち止まる人、そっと触れようとする人、写真を撮る人などさまざまです。花は、特に桜の存在感は大変なものだなあと、毎年のことながら、しみじみと感じ入ります。

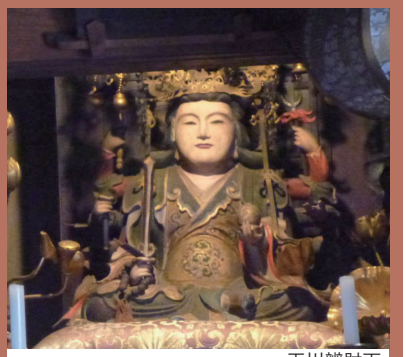
景色を変えるチカラを持つ桜、特に染井吉野は植栽の本数も多いので、結果そうなるとは思いつつ、これからは他の桜も見逃せません。個人的に一番のお勧めは「鬱金（うこん）」。ややシャープな八重の花びらに、穏やかな黄緑色がふわふわっとかかって、その美しさといったら！ 一本あるだけで、その場所に、ほのぼのとした春の陽光の気配を感じさせます。咲き進むと、花の真ん中から濃いピンク色を帯びてきて、ほんのり色っぽくもなります。かつてはその桜、その一本に会うために、千葉から調布市の神代植物公園に、毎年通っていました。昨年、王子の飛鳥山公園にあるのを見つけました。平日でも人もお酒で大賑わい、さすが江戸時代からの花見の名所ですが、「黄色い桜だ！」と驚かれると、自分のことのように嬉しくなります。同じ時期には「普賢象（ふげんぞう）」「関山（かんざん）」など、古くから伝わる八重桜の名品も次々と花開きます。柔らかく美味しそうに芽吹く新葉と、幾重もの優しいピンク色、感触の花びらと…いよいよ原稿どころではない、ココロ落ち着かない、年に一度しかない季節です。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

江戸

名所図会を歩く…⑲

[貴船明神社から要島辨財天社]



玉川辨財天

今回は大森から羽田のエリアを歩きます。旧東海道の幅員を今も残している美原通りを歩いてみたくなり、出発点は京急平和島駅としました。美原通りから内川橋を渡り、産業道路に出て最初の信号を左折します。厳生寺の大屋根が見えたら最初の目的地、貴船神社はもうすぐです。

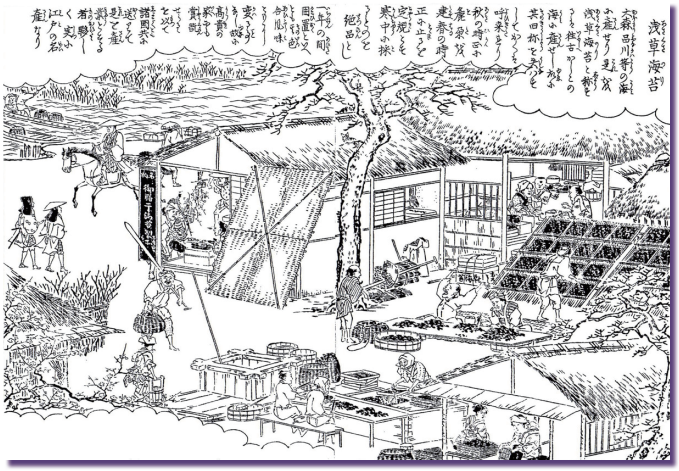
貴船明神社から蒲田梅林

貴船神社は「大森村海道より右にあり。此地の産土神にして別當は真言宗大森寺と号す。来由詳ならず」としか書かれていません。境内にある末社の熊野神社が文永３年(1266)に創建されたといわれ、貴船神社はそれ以前からあったと推測されています。全体の雰囲気は古社の趣があり、拝殿前には小さな石の神橋、左側には神楽殿、その奥に末社の稲荷神社と熊野神社があります。参道脇には、大森地区の海苔養殖の終焉を記念した「漁業納畢之碑」がありました。

貴船神社を出て京急梅屋敷駅方面に向かいます。駅東側の第一京浜のあたりは旧東海道の間の宿、大森宿のあったところで、蒲田梅屋敷の梅園、道中常備薬で有名な和中散、麦藁細工の郷土玩具を売る店や海苔茶漬けの茶店などがあり広く知れ渡っていました。今その面影はありませんが、梅屋敷駅へ向かう東商店街を歩くとさすがに海苔のお店が目につきました。商店街を抜け、第一京浜に沿って少し南下すると梅屋敷公園があります。文政のはじめ頃(1820頃)、和中散を商う山本久三郎が近在から梅の木を集めて庭園を造り、街道の休み茶屋も設けて酒肴を出すようになったため、大いに賑わったといいます。街道の両側にまたがった3000坪にも及ぶ見事な庭園で、将軍のお成りや明治になると明治天皇の行幸もあったほどでしたが、今はそのごく一部が残されて聖跡蒲田梅屋敷公園となっています。訪れた時はちょうど梅がほぼ満開になっていました。

性光山圓頓寺から行方山妙安寺

梅屋敷公園を出て、京急の高架下を抜け、圓頓寺に向かいます。池上本門寺の旧末寺であるこのお寺は「当寺は小田原北条家の臣、六郷の領主行方弾正忠直清の宅地の旧跡にして当寺開創の檀那なり」とあります。中興開山の日芸上人は直清の弟で、小田原落城の際に池上本門寺に逃れて出家し、行方一族を弔うために旧館跡にお寺を建てたといわれます。行方家の墓域には直清の供養塔と、日芸の宝篋印塔がありました。



▲長谷川雪旦　　浅草海苔

圓頓寺を右に出るとすぐに石の鳥居を構えた大きな神社が見えます。稗田神社とあり、歴史のある神社のようで、なぜ図会にないのか不思議な感じがしました。寛政12年(1800)寄進の石鳥居は大田区の文化財とあり、４年前の震災でもびくともしなかったようです。さらに南下し、多摩堤通りを横断して少しすると蒲田八幡宮です。旧蒲田新宿村の村社で、開創年代は不明ですが、社伝によると宇佐八幡宮を勧請した古社ということです。境内には小円墳があったようですが、今は消滅してしまいました。

ここに隣接しているのが旧別当の妙安寺です。山号の行方山が示すように、行方氏ゆかりのお寺です。「行方氏室圓光院妙案日行大姉の菩提所と云」とある、その墓所は本堂の手前左側にようやく見つけました。

朗羽山長照寺から要島辨財天社

妙安寺の次は京急蒲田駅に出て、電車で２駅の大鳥居駅で下車、朗羽山長照寺です。図会では「朗羽山」とありますが、今の山号は「羽田山」です。「猟師町にあり。日蓮宗なり。当寺に豊太閤秀吉公の守仏なりと称して北辰明見大菩薩を安ず」という記述しかないので、その妙見様は本堂右手のお堂に祀られているのかと、お寺の人に尋ねてみました。洪水などにあっているので、言い伝えのものとは違うが、妙見大菩薩と鬼子母神、八大龍王神を祀っているということでした。

長照寺を出て川沿いの道を東に行き、産業道路を横断すると左側に龍王院があります。龍王院は要島辨財天社の別当で、ここには上宮、羽田の要島に下宮があり、特に下宮は風光明媚な海浜にあって江戸近郊の名所になっていました。図会には「羽田村の南の洲崎にあり。故に羽田辨財天とも称せり……本尊辨財天の像は相州江島本宮巌窟辨財天と同躰にして弘法大師の作なりといへり」とあります。要島は終戦時に米軍に接収されたため、下宮は龍王院から10分ほどの水神社の敷地内に移転し、今は玉川辨財天と呼ばれています。お堂の中をのぞき込むと、美しいお顔の辨財天像が拝めるようになっていました。羽田空港はここから目と鼻の先です。

【取材】歩いた人(文・写真とも)：
広報部会・中村貞子

(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

『江戸名所図会』巻之二、天璇之部はこのあと多摩川を越えて川崎に入るのですが、このシリーズでは川を越えずに羽田で終わります。次回からは巻之三、天璣之部の部に入って都心に戻り、歩く人も広報部会の菊池真一さんに代わります。新たな視点からの名所図会散歩をお楽しみ頂けることと思います。ご期待下さい。

催事案内

古文書講座

5月から第1期を開講

新年度第1期は5月から開講します。申込の受付は終了していますが、以下日程をお知らせします。

◆入門編
- 講師：田中潤さん(学習院大学非常勤講師)
- 開催日：5／13(水)、6／10(水)、7／1(水)

◆初級編
- 講師：安藤奈々さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：5／20(水)、6／17(水)、7／15(水)

◆中級編
- 講師：吉成香澄さん(豊島区教育委員会非常勤職員)
- 開催日：5／16(土)、6／13(土)、7／18(土)

- 時間：各講座とも
  午前の講座は10時30分～12時30分
  午後の講座は14時～16時
- 会場：各講座とも江戸博1階会議室
- 参加費：各講座とも全3回1,500円(初回一括払い)

【企画担当責任者】宮　俊(事業部会)

友の会特別観覧会

● 2015年NHK大河ドラマ特別展「花燃ゆ」

◆本年正月から始まった、NHK大河ドラマ「花燃ゆ」と連動した特別展です。ドラマは吉田松陰の妹・文の生涯を描くものですが、松陰や文ゆかりの資料や、同時代の歴史資料が展示され、彼らが生きた幕末から明治維新期までの激動の時代が紹介されます。担当の田原昇学芸員に「見どころ解説」をお願いしていますのでご期待ください。

- 開催日：6月5日(金)
  17時～17時30分：見どころ解説
  17時30分～19時：展覧会場自由観覧
- 申込締切：5月18日(月)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール／1階展示室
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】下永博道(事業部会)

友の会セミナー

第152回「役者絵の成立と発展」

講師　小林　優さん(足立区立郷土博物館専門員)

◆菱川師宣によって確立されたという浮世絵が鈴木春信によって多色摺りの版画に発展し、錦絵と呼ばれるようになりました。特に歌舞伎役者の似顔絵は現代のブロマイドのようなもので老若男女に人気を博しました。役者絵の流れは鳥居派から勝川派へ、そして歌川派へと一大発展を遂げます。本年2月から4月にかけて足立区立郷土博物館で役者絵に焦点を当てた浮世絵展が開催されました。それを担当された小林専門員に、浮世絵における役者絵発展の歴史を足立区立郷土博物館所蔵の浮世絵の特徴などを踏まえてお話ししていただきます。

◆講師略歴：こばやし・ゆう
昭和60年(1985)茨城県日立市生まれ。帝京大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。幕末明治以後の日本美術史が専門。現在、足立区立郷土博物館専門員として当館収蔵の浮世絵研究の他、足立区内における美術史的展開の調査に取り組んでいます。拓殖大学非常勤講師。

- 開催日時：5月23日(土)　14時～15時30分
- 申込締切：5月11日(月)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】清水昌紘(事業部会)

第153回「太田道灌―江戸を切り開いた悲劇の名将―」

講師　黒田　基樹さん(駿河台大学教授)

◆太田道灌(1432－1486)は、江戸城を築き、兵法にも長じ、また「山吹の里」伝説にみられるように、文芸にも造詣が深い、関東戦国時代初期の文武兼備の武将として知られています。さらに最期は主君の扇谷上杉定正に謀殺されてしまう、悲劇の人物でもあります。太田道灌を生み出した時代の状況、関東初期の戦乱のなかでの道灌の動向、ライバル長尾景春との戦い、そして主君から謀殺される理由など、戦国時代の幕開けを担った太田道灌について、お話ししていただきたいと思います。

◆講師略歴：くろだ・もとき
昭和40年(1965)生まれ。早稲田大学教育学部卒。平成11年博士(日本史学・駒沢大学)。駒沢大・立教大非常勤講師を経て、現在、駿河台大学法学部教授。専門：戦国時代、織田豊臣時代史、後北条氏、甲斐武田氏。著書：『扇谷上杉氏と太田道灌』『図説太田道灌』『百姓から見た戦国大名』『戦国大名　政策・統治・戦争』等。

- 開催日時：6月27日(土)　14時～15時30分
- 申込締切：6月18日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】国定美津子(事業部会)

第154回「地名からひもとく、江戸東京の街の変遷」

講師　岩垣　顕さん(江戸東京文化研究家)

◆東京の地名・町名に潜む意外な歴史。例えば、「両国」。これが、武蔵・下総の両国を結んだ両国橋に因むことは、皆さんもご存知でしょう。しかし、正式な町名として両国の名が採用されたのは、昭和に入ってから。そして橋の東西に両国の町名が共存したのは僅か数年……。と、こんなエピソードを交えながら「地名から歴史を探ると、街歩きがもっと楽しくなる」をコンセプトに、多様な江戸東京の地名・町名を次々とご紹介します。

◆講師略歴：いわがき・あきら
日本大学芸術学部卒業　富山県出身。『東京35区地名事典』『歩いて楽しむ江戸東京旧街道めぐり』『神田川遡上』『荷風日和下駄読みあるき』その他著書多数、荷風・都電関係の講演、NHK TV「美の壺」出演。

- 開催日時：7月11日(土)　14時～15時30分
- 申込締切：6月25日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】小林弘明・林　正信(事業部会)

見学会

『江戸名所図会』の挿絵で歩く江戸の町(2)
九段下～御茶ノ水～岩本町

◆天保年間に出版された『江戸名所図会』は、江戸の風景を画家の長谷川雪旦が精密に描写した挿絵を満載したガイドブックです。挿絵に描かれた場所は、今では名残・痕跡などあまり残ってはいませんが、現代の風景と重ね合わせながら江戸の町を歩きましょう。今回は、九段坂から水道橋に出て神田川沿いに和泉橋まで、5枚ほどの挿絵の場所をめぐります。歩行距離は約4km、所要時間は約2時間半を予定しています。解散は東京メトロ日比谷線「秋葉原」駅近くとなります。

- 5月31日(日)　小雨決行
- 集合時間：13時15分(時間厳守)
  受付は12時45分より開始、集まり次第出発
- 集合場所：東京メトロ東西線・半蔵門線、都営地下鉄新宿線「九段下」駅
  出口A3地上出口より左5mの「北の丸スクエアビル入口」前
- 申込締切：5月21日(木)必着
- 定員：150人　同伴者可(保険申込の都合上、はがきに氏名、住所、電話番号を連記)
- 参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】下永博道(事業部会)

会員優待のお知らせ

●徳川家康没後400年記念　特別展
「大 関ヶ原展」

会期残り僅か お見逃しなく！

会　期：3月28日(土)～5月17日(日)
会　員：一般670円、65歳以上340円、大・専門生540円
同伴者：一般1,080円、65歳以上540円、大・専門生860円
＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。
●(注)割引を受けられる同伴者は1人だけです。

次回予告

●2015年NHK大河ドラマ特別展
「花燃ゆ」

会　期：6月4日(木)～7月20日(月・祝)
休館日：毎週月曜日(ただし7月20日は開館)
会　員：一般670円、65歳以上340円、大・専門生540円
同伴者：一般1,080円、65歳以上540円、大・専門生860円
＊高校生は65歳以上と同じ。中学生以下は無料。
●(注)割引を受けられる同伴者は1人だけです。

企画展のご案内

会期残り僅か お見逃しなく！

●リニューアル記念企画展
特別公開 広重「名所江戸百景」展

会　期：3月28日(土)～5月10日(日)
会　場：常設展示室　5F 企画展示室

次回予告

●発掘された日本列島2015

会　期：5月30日(土)～7月20日(月・祝)
休館日：毎週月曜日(ただし7月20日は開館)
会　場：常設展示室　5F 企画展示室

「江戸名所図会を歩く」 訂正とお詫び

82号の長栄山本門寺の項で入力ミスがありました。「池上衛門大夫宗仲」は、「池上右衛門大夫宗仲」、その5行下の「宋仲」は「宗仲」が正しい表記です。同じく83号でも洗足池の項で「宗仲」を「宋仲」としていました。確認も不十分でした。訂正してお詫び致します。

催事のお申込方法

◆普通はがきに、
①催事名(略名可)・開催日
②会員番号(必須)
③氏名(同伴者連記)
を明記して下記の「友の会事務局」へ。
◆申込は、催事ごとに会員1人1通。
◆友の会へのご意見・ご要望があれば記入して下さい。
◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網1－4－1
江戸東京博物館「友の会事務局」
＊「えどはくカルチャー」など江戸博への申込とは違います。

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付で登録して下さい。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ち下さい。
＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります**。
＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**火曜日か金曜日(10時～12時、13時～17時)**にお願いします。
＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加下さい。

会報＜えど友＞第85号
平成27年5月1日発行（奇数月1日発行）
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会
E-Mail：edo_tomo_koho@yahoo.co.jp

発行人：畠中　勇(会長)　編集長：中村貞子
岡本　脩、佐藤幸彦、福島信一、内匠屋京子、佐藤美代子、前田太門、菊池真一、竹中祐見子、光田憲雄、中山達雄
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網1－4－1　電話03-3626-9910